

寄贈作品

工芸品類・陶磁 5点、墨書類 5点 計10点

No.	作者名	作品名	制作年	寸法（縦×横）
1	加藤卓男	正倉院復元 三彩風 字硯	1989年頃	幅 13.0cm 奥行 14.5cm 高さ 2.0cm
		正倉院復元 三彩水 滴	1989年頃	幅 10.0cm 奥行 4.9cm 高さ 5.0cm
		正倉院復元 三彩筆 架	1989年頃	幅 10.0cm 奥行 4.9cm 高さ 5.0cm
2	加藤孝造	黄瀬戸茶碗	2022年	胴径 13.2cm 高さ 9.1cm 底径 6.0cm
3	十三代 三輪休雪	寧	2023年	径 20.0cm 高さ 10.0cm
4	福島善三	中野月白瓷 香炉	2022年	最大径 14.0cm 高さ 10.0cm
5	今泉今右衛門	色絵雪花墨色墨はじ き雪松文花瓶	2023年	胴径 27.3cm 高さ 24.5cm
6	伝後円融天皇宸筆	古今和歌集	室町初期	23.2×16.0cm
7	後小松天皇宸筆	新古今和歌（全三冊）	南北朝～室 町期	18.9×13.8 cm
8	飛鳥井雅春	伊勢物語	江戸初期（天 文年中）	24.5×16.3 cm
9	不詳	つれづれ草（全二冊）	江戸初期	各 23.4×16.8 cm
10	不詳	平家物語（全十二冊）	江戸初期	各 23.6×17.3 cm

美術資料調書 1

作家名 加藤卓男 (かとう・たくお)

作品名 正倉院復元三彩風字硯附三彩水滴、三彩筆架

①正倉院復元三彩風字硯

②正倉院復元三彩水滴

③正倉院復元三彩筆架

制作年 いずれも1989年頃

寸法 硯幅13.0cm 奥行14.5cm 高さ2.0cm

水滴幅10.0cm 奥行4.9cm高さ5.0cm

筆架幅10.0cm 奥行4.9cm 高さ5.0cm

材質技法 いずれも陶磁器、型成形とみられる

附属 箱、陶歴、新聞記事1、印刷物1

箱書：正倉院復元三彩風字陶硯、「卓」の落款印章（朱文方印）

備考 ①加飾：三彩、絵具を筆で塗り分け

釉調：発色が濃く、貫入が見られる。

硯内部は無釉、それ以外には青みがかった透明釉をかける。

底部：「卓」刻字銘、2列の平たい削り

②加飾：三彩、絵具を筆で塗り分け

釉調：発色が濃く、貫入が見られる。全体に施釉あり。

底部：「卓」刻字銘

底部まで釉だまりあり、焼成時のひつつきあり

③加飾：三彩、絵具を筆で塗り分け

釉調：発色が濃く、貫入が見られる。全体に施釉あり。

底部：「卓」刻字銘、目跡3点あり

分類 工芸・陶磁

収集区分 寄贈

年譜 加藤卓男 (1917～2005)

1917 (大正6) 年 江戸時代から続く美濃焼窯元五代目加藤幸兵衛の長男として、岐阜県土岐郡市之倉村(現、多治見市市之倉町)に生まれる。

1961 (昭和36) 年 フィンランド工芸美術学校に留学

休暇を利用し中東各地の陶器産地を訪れ、古代ペルシャ陶器に触れる。

1980 (昭和55) 年 宮内庁正倉院事務所より正倉院三彩「三彩鼓胴」「二彩鉢」の復元を委嘱される。

1983 (昭和58) 年 多治見市と岐阜県の重要無形文化財技術保持者に認定

1988 (昭和63) 年 紫綬褒章受章

1995 (平成7) 年 重要無形文化財「三彩」保持者に認定

作品の評価

本作は加藤氏による1988年正倉院宝物復元の関連作品と考えられる。

寄贈者によると伊勢神宮に納めた(附属の新聞参照)片割れとのことだが、加藤氏が硯を制作した1992年(式年遷宮が1993(平成5)年)とは異なる。また、同社御神宝は「陶猿頭形御硯」(猿面硯)と形も異なる。

参考

(加藤卓男::東文研アーカイブデータベース(tobunken.go.jp)) 2024年1月現在
1988年の正倉院宝物模造について
「三彩鼓胴」 (0000000164 (kunaicho.go.jp)) P.31、
「二彩鉢」 (0000000158 (kunaicho.go.jp)) P.29



美術資料調書 2

作家名 加藤孝造 (かとう・こうぞう)

作品名 黄瀬戸茶碗 (きせとちやわん)

制作年 2022年 (令和4)

寸法 胴径13.2cm 高さ9.1cm 底径6.0cm

材質技法 陶器、高台削り出し

付属 箱、陶歴、白布

備考 加飾：黄瀬戸釉、タンパン (か)

釉調：暗色の黄瀬戸釉を厚くかける

底部：高台脇にヘラで刻印あり

分類 工芸類・陶磁

収集区分 寄贈

年譜

加藤孝造 (1935～2023)

1935年 岐阜県瑞浪市に生まれる

1948年 岐阜県陶磁器試験場にて五代加藤幸兵衛に陶芸の指導を受ける。

1955年 岐阜県陶磁器試験場工芸科、主任技師

1965年 多治見市星ヶ台に薪・石灰併用の倒焰式単室窯を築く

1970年 岐阜県陶磁器試験場工芸科退職

多治見市星ヶ台に半地上式単室穴窯を築く

1971年 可児市久々利平柴谷に穴と登窯を築き、桃山陶芸技術を追求

1990年 美濃陶芸協会会長

1991年 多治見氏無形文化財「志野・瀬戸黒」認定保持者となる

1995年 岐阜県重要無形文化財「志野・瀬戸黒」認定保持者となる

2005年 地域文化功労者文部科学大臣表彰

2007年 紺綬褒章受章

ロンドン大英博物館主催日本伝統工芸展五十年記念「わざの美」展出展

2008年 岐阜県文化功労者顕彰

2010年 重要無形文化財「瀬戸黒」保持者(人間国宝)認定

2012年 旭日小綬章受章

はじめ洋画家を志し1954年には日展にも入選するが、翌年より陶芸に進路を固める。重要無形文化財「志野」「瀬戸黒」保持者の荒川豊蔵にも師事。加藤孝造の作品は、文化庁、東京国立近代美術館、ニューヨーク・クラフト美術館、岐阜県美術館、宮内庁・赤坂迎賓館、岐阜県現代陶芸美術館、茨城県陶芸美術館、ヴィクトリア&アルバート博物館に収蔵されている。

作品の評価

本作は最後の展覧会となった2022年「重要無形文化財保持者加藤孝造陶展」（日本橋三越本店）に出品したものである。



美術資料調書 3

作家名 十三代三輪休雪 (みわ・きゅうせつ)

作品名 寧 (「やすらか」とあるが正しくは「ねい」かと)

制作年 2023年 (令和5)

寸法 径20.0cm 高さ10.0cm

材質技法 陶器、薬師寺東塔基壇土使用 (紫がかった褐色の胎土、粒子が荒い)

付属 箱、陶歴、布

備考 加飾：白萩釉

釉調：大胆な梅花皮から胎土がのぞく

底部：高台削り出し、高台内にも一部釉がかかる、高台脇に印などはなし

分類 工芸類・陶磁

収集区分 寄贈

年譜

1951年 山口県萩市に十一代三輪休雪 (壽雪) の三男として生まれる

1975年 米国サンフランシスコ・アート・インスティテュート (SFAI) に遊学

1981年 帰国後、不走庵三輪窯において作陶に入る

2007年 日本陶磁協会賞受賞

2012年 山口県選奨受賞

2019年 十三代三輪休雪を襲名

2021年 日本陶磁協会賞金賞受賞

山口県萩市に江戸時代初期から続く萩焼窯元の名家に生まれる。アメリカに留学し現代アートを学ぶほか、アメリカ大陸の大自然エネルギーを体感したことは、帰国後の活動基盤となった。茶碗シリーズ「エルキャピタン」大自然のエネルギーの表出と、伝統の「休雪白」が相まって独自の造形を生んでいる。他にも「淵淵」「寧」と茶碗シリーズを制作。萩焼の概念を打ち破る独自の表現が注目を集める。

作品は、山口県立美術館萩美術館・浦上記念館、東京国立近代美術館、国際交流基金、茨城県陶芸美術館、岐阜県現代陶芸美術館、兵庫陶芸美術館、滋賀県立陶芸の森、ピーボディー・エセックス博物館、ロサンゼルス郡立美術館、台湾新北市立鶯歌陶瓷博物館、ボストン美術館などに収蔵される (付属参照)。

作品の評価

本作は日本橋三越本店で開催された「エルキャピタン十三代三輪休雪展」(2023年3月15日(水)～2023年3月20日(月))に出品したもの。薬師寺東塔基壇の土を使用し轆轤で成形。

参照

(特別展十三代三輪休雪茶の湯の造形 | MOA美術館 | MOA MUSEUM OF ART (moart.or.jp)) 2024年1月現在

(エルキャピタン十三代三輪休雪展 | アートギャラリー | 日本橋三越本店 | 三越伊勢丹店舗情報(mistore.jp)) 2024年1月現在

美術資料調書 4

作家名 福島善三（ふくしま・ぜんぞう）
作品名 中野月白瓷香炉（なかのげっぱくじこうろ）
制作年 2022年（令和4）

寸法 最大径14.0cm 高さ10.0cm

材質技法 陶器、胎土は鉄分の多い赤土（小石原産）

付属 銀製透彫蓋、箱、布（善三）

備考 加飾：月白釉
釉調：淡くしっとりした乳濁釉
底部：「善三」印あり

分類 工芸類・陶磁

収集区分 寄贈

年譜

1959年 福岡県小石原村（現・朝倉郡東峰村）に生まれる
1991年 第26回西部伝統工芸展朝日新聞社金賞
1999年 日本陶芸展大賞（桂宮賜杯）受賞
2003年 第50回日本伝統工芸展日本工芸会総裁賞
2009年 第44回西部伝統工芸展福岡市長賞
2013年 第60回日本伝統工芸展高松宮記念賞
2014年 紫綬褒章受章
2017年 重要無形文化財「小石原焼」の保持者に認定。

福島善三は小石原焼窯元「ちがいわ窯」の16代目で、57歳という若さで人間国宝に認定されている。

作品の評価

本作は素地に厚みがあり重い。月白釉には小石原のわら灰を用いる。貫入がない。

参 照

（18. 陶芸福島善三氏—生涯学習開発財団(gllc.or.jp)）2024年1月

美術資料調書 5

作家名 今泉今右衛門 (いまいずみ・いまえもん)
作品名 色絵雪花墨色墨はじき雪松文花瓶
(いろえせっかすみいろすみはじきゆきまつもんかびん)
制作年 2023年 (令和5)
寸 法 胴径27.3cm 高さ24.5cm
材質技法 磁土、内部に轆轤目のような筋あり
付 属 箱、陶歴、布 (印あり)
備 考 加飾：上絵、プラチナ彩
釉調：ツヤのある透明釉
底部：「今右衛門」刻印
分 類 工芸・陶磁
収集区分 寄贈

年 譜

1962年 佐賀県有田町に生まれる
1985年 武蔵野美術大学工芸工業デザイン学科 (金工専攻) 卒業
1988年 京都・鈴木治氏に師事
1990年 有田・父十三第今右衛門の許、家業に従事
2002年 十四代今泉今右衛門を襲名
2009年 紫綬褒章受章
2014年 重要無形文化財「色絵磁器」の保持者に認定
2017年 奈良・薬師寺食堂落慶に際し三具足を奉納
2020年 公益社団法人日本工芸会副理事長就任

江戸初期以来の鍋島藩窯の流れを汲む陶家に生まれる。(同家は江戸時代には、上絵(赤絵・色絵)を専門とするいわゆる御用赤絵屋として、鍋島藩直営の色絵磁器・色鍋島の制作の一翼を担った)氏は「雪花墨はじき」や「プラチナ彩」など伝統的な技法だけではなく新しいスタイルを生み出し、色鍋島の可能性を広げている。

作品の評価

本作はセイコーハウス銀座ホールにて開催した「十四代今泉今右衛門展—暮らしとともに—」に(2023年5月11日(木)～5月21日(日))に出品したものである。

「墨色墨はじき」は十三代の薄墨に使われているグレーの絵具を墨はじきで白抜きする技法。「雪花墨はじき」の技法でうっすらと花の模様が浮かんでいる。生地より白い化粧土を塗る墨はじきの技法を用いており、生地と化粧土の白さの違いだけで表現する独自の技法である。「プラチナ彩」にはペースト状のものを用いており、上絵の窯で焼成し、白金色に呈色させている。

参 考

『十四代今泉今右衛門展—暮らしとともに—』和光
(今右衛門・IMAEMON | 14代今泉今右衛門・色鍋島今右衛門窯・東京店)

美術資料調書 6

作家名 伝後円融天皇宸筆（でんごえんゆうてんのうしんぴつ）
作品名 古今和歌集
制作年 室町初期写
寸法 23.2×16.0
形態 綴葉装
附属 三重箱、古筆了仲極札
備考 加賀前田家伝来、貞応二年本系統
白木の外箱に加賀前田家旧蔵の口張がある。
分類 書籍・冊子類/研究資料
収集区分 寄贈

年譜

後円融天皇（1358～1393年）

北朝第五代の天皇で、後光厳天皇の第二皇子として生まれた。母は崇賢門院仲子。名は緒仁親王。応安四年（1371）3月、14歳の時に後光厳天皇より譲位された。永徳二年（1382）まで在位し、三月に皇子幹仁親王に譲位され、以降は院政を執った。

和歌に力を入れ、天授元年（1375）に二条為遠に『新後拾遺和歌集』を撰ばせた。

作品の評価

本書は貞応二年の奥書があり、仮名序に「あさかやま…」の歌を持たないことから、貞応二年本系統であると分かる。『日本古典文学大系』所収の本文と比較すると、一部勸物注記に異同と朱書きによる訂正が見られる。朱合点がつけられ、声点も差されることから、当時のアクセントや読み方を知る好資料と言える。書写奥書はないが、古筆了仲の極札では後円融天皇宸筆とある。

貞応二年本は二条家の証本として、また二条派による古今伝授の中で重きを成し広く流布した。しかし近年室町初期の古写本が巷間に現れる機会は激減しており、本書は極めて貴重である。また、古典籍の蒐集で知られる加賀前田家電話委の由緒ある伝本という点も評価される。

（思文閣『和の史思文閣古書資料目録』第二百七十五号参照）

表紙は紺地に牡丹・若松を中心に小槌・蓑・分銅模様を散りばめた金欄装で、左上部に、金砂子散金霞引金泥下絵入の料紙に「古今和歌集」と墨書した題箋を貼る。

美術資料調書 7

作家名 後小松院宸筆（ごこまついんしんぴつ）

作品名 新古今和歌（全三冊）

制作年 南北朝～室町

寸法 18.9×13.8

形態 綴葉装

附属 木箱（印籠蓋）

備考

分類 書籍・冊子類/研究資料

収集区分 寄贈

年 譜

後小松天皇/後小松院（1377～1433）は後円融天皇の第一皇子として生まれる。生母は三条公忠の娘通陽門院巖子。永徳二年（1382）に授禪、即位して北朝の天皇となり、太政大臣二条良基の摂政を受けた。明德三年に南北朝合一。永享三年（1431）に出家、法諱を素行智と号した。翌々年に五十七歳で崩じた。

詩歌・連歌に優れ、『新続古今和歌集』に収められている。書道は父後円融院が書流の祖である勅筆流を継ぐ。

作品の評価

「新古今和歌集」を南北朝～室町期に写したもので、上中下の全三巻に纏める。下巻末に古筆了仲による極書がある。

寄贈者曰く、本作は乱帖が認められるとのこと。

表紙は紺地の七宝繫ぎに花菱に囲われた龍を並べた金襴装で、左上部に金砂子散金霞引料紙に「新古今上（中、下）」と墨書した題箋を貼る。見返しは金箔を敷き詰めた上に銀箔を散らす。

美術資料調書 8

作家名 飛鳥井雅春（あすかい・まさはる）筆

作品名 伊勢物語

制作年 江戸初期（天文年中）

寸 法 24.5×16.3

形 態 綴本冊子

附 属 塗箱、折紙

備 考 箱書：伊勢物語/飛鳥井雅春卿/外題勸修寺尹豊卿

折紙：古筆了仲（1820～1891）による飛鳥井雅春宸筆の鑑定書

分 類 書籍・冊子類/研究資料

収集区分 寄贈

年 譜

飛鳥井雅春（1520～1594年）前権大納言雅綱の三男として生まれる。母は丹波親康の娘。

初名は雅教、1575年（天正3年）63歳で雅春と改名する。

飛鳥井家は代々蹴鞠や歌道で有名。書については、曾祖父雅親（栄雅・1417～1490）を祖とする栄雅流の能書として知られる。

勸修寺尹豊（かじゅうじ・まさとよ）（1503～1594年）権大納言尚顕の子。

作品の評価

「伊勢物語」を江戸時代初期に写したもの。

表紙は青地に唐草紋をあらわし、隙間に菱をしき詰めた金欄装で、中央上寄りに、朱地に金下絵をほどこした料紙に「伊勢物語」と墨書した題箋を置く。見返は金。

美術資料調書 9

作家名 不詳
作品名 つれづれ草 (全二冊)
制作年 江戸初期
寸法 各23.4×16.8
形態 綴本冊子
附属 木箱、塗箱 (寄贈者新造)
備考 上下巻の2冊
分類 書籍・冊子類/研究資料
収集区分 寄贈

作品の評価

兼好法師による鎌倉時代の随筆を、江戸時代初期に写したもの。上巻は「つれづれなるままに」より始まり、下巻は「花は盛りに月はくまなきを」に始まる。

表紙は青まじりの灰色の紙本地に金砂子散金霞引金泥下絵入で、その中央上寄りに、金砂子散金霞引の紙に「つれづれ草上(下)」と墨書し置く。見返は金。

美術資料調書 10

作家名 不詳
作品名 平家物語（全十二冊）
制作年 江戸前期写
寸法 各23.6×17.3
形態 綴葉装
材質技法 紙本
落款等
附属 被蓋の木箱（箱書あり）、塗箱
備考 流布本系、全12冊、挿絵なし、灌頂の巻までを収める
分類 書籍・冊子類/研究資料
収集区分 寄贈

作品の評価

鎌倉時代に成立したとされる『平家物語』を全十二巻に纏めたもの。巻第十二に灌頂巻も含めている。同物語は異本が多く、本作は「灌頂巻」があり、巻第六末に「国綱卿の事」がなく、他にも「宗論（高野御幸）」「剣」「鏡」の章段を欠くことから、流布本系に属すると考えられる。※各巻収録内容は調書末に記載。

表紙は青色地に桐唐草文様を織り出した金襴装で、中央には金銀砂子散金泥下絵入の料紙に「平家物語一（～十二）」と墨書した題箋を貼る。見返は金。

若干の浸み跡が見られるが状態は良好である。

金襴表紙など豪華な装丁で誂えられ、本文にはふりがなや濁点が振られていることから、武家などの子女に供されたいわゆる「嫁入本」として制作された可能性がある。